

地方小出版 情報誌

アクセス

毎月1回 1日発行
購読料 定価150円
(本体136円)
年間1,500円(税込み)
振替 00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

思えば遠くへ来たもんだ 創業40周年を迎えて思うこと

文/創風社出版・代表 大早友章

愛媛県松山市郊外で出版業を営んでいます。創業は1985年1月。今年40周年を迎えた。気がつくと40年が過ぎていた、という気分で、あまり実感がなく、戸惑っている。そんな時、「アクセス」誌さんに40年の活動を振り返ってみませんか、とお声かけいただいた。この機に、これまでを振り返つてみたい。

1977年5月。愛媛県宇和島市で高校生活を送り、京都・東京で学生時代を過ごした同級生3人が、アルバイトで貯めたお金を持ち寄って、県都・松山市で喫茶店を始めた。創風社出版の来歴を語ろうとすると、話はどうしてもそこに立ち返る。

高度成長期の最中であった。世の中は、確かに豊かさのイメージに満ちており、若者の人一人、どうやってでも生きていけそうな、そんな空気があった。「就職」しなくとも何とかなるのでは、と。人々の集う場所を作りたい、というのが動機だったが、喫茶店に関してはアルバイト程度の経験しかない手探りの開業、今思えば、無謀な起業だった。

開業に至るまでに仲間の一人は故郷・宇和島に望む仕事を得て就職。残った二人は、喫茶「風の街」を起こし暮らしと仕事の場として、松山に根を下ろした。

やがて、二人は結婚し、子どもが生まれた。夜はアルコールも出し深夜まで営業していた喫茶「風の街」は、次第に自分達の場所として合わなくなってきた。通ってくれていた同世代の客たちも、喫茶店に集う季節を過ぎよう



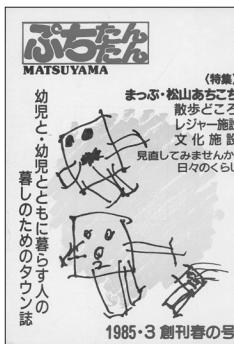
創風社出版事務所

としていた。7年半で、閉店した。

そして、1985年1月。創風社(当時)を立ち上げた。

高度成長期からバブル期へと時代は移っていたが、好景気は続いていた。世の中も、もしかしたら失敗するかも知れない若者の存在を許してくれていた…ように思う。実は、出版社を起こすなど、一般的の感覚では喫茶店の開業よりも「とんでもない」話、周囲は、やっていけるのかと戦々恐々の思いで見守っていたらしいことは、後々知った。

なぜ、喫茶店の次が出版社だった



創風社出版、最初の出版物となつた子育て情報誌「ぶちたんたんMATSUYAMA」発行
1985年3月



『新版 絵日記 丸山住宅ものがたり』発行2022年12月／税込定価1,980円／ISBN978-4-86037-333-7

のか?

一言で言ってしまうと、「ワープロが登場し、手に入る価格になったから」である。

自分の手で、文字を活字にできる。すなわち、本を作ることができる。

なんと、私たちは、「出版」というものを、具体的な意味においての「本作り」と捉えていたのである。ワード・プロセッサー、コピー機、簡易プリンターは、三種の神器であった。松山市内の比較的便利な地に小さな事務所を開き、まずはプリントショップからスタートした。

開業まもなくの3月、最初の出版物、子育て情報誌「ぶちたんたんMATSUYAMA」を発行。ワープロとコピーを駆使して切り貼りの誌面を作り、簡易プリンターで印刷した。

本は、出来た。さて、どうやって売るか。

とりあえず紀伊國屋書店に持って行き、相談した。と、扱ってくれるという。これに自信を得て、松山市内の書店を一軒残らず(多分)訪ね、置いてもらった。当時は書店の数が多く、また次々と大型書店が出来、プリントショップの仕事の合間に縫っての配本には毎回3~5日ほど要したものだった。



『潮汐・潮流の話 科学者になりたい少年のために』発行1987年10月／税込定価1,650円／ISBN978-4-915699-01-6

翌1986年秋、最初の単行本『絵日記・丸山住宅ものがたり』（神山恭昭）を出版した。著者・神山さんのユニークな絵と手書き文字を、簡易プリンターでセピア色のインクで印刷。箱入りの本の箱の表は、シルクスクリーンで二人で印刷した。松山市内の書店を中心によく売れ、増刷となつた（現在、この版は絶版、電子図書化。DVD『ほそぼそ芸術 ささやかな天才、神山恭昭』の付録付きの『新版 絵日記丸山住宅ものがたり』を販売中）。

翌々年の1987年、『潮汐・潮流の話—科学者になりたい少年・少女のために—』（柳哲雄 愛媛出版文化賞受賞）を出版。

さて、この本をどう売るか。著者によると、この本の読者は海洋学者や海洋学に興味のある人たちで、全国に散在しているという。DMを出そう。そして、全国の流通は地方・小出版流通センターにお願いしよう。そう決めるなり、書類を送り、入金し、こちら側の加入手続きを勝手にすませてしまつて、地方・小出版流通センターの川上さんにあきれられた。本来なら今後の出版計画などセンターと話し合つたうえでの加入となるのだそうだ。幸い、当時愛媛県内で活発にセンターを利用していた出版社がいなかつたこともあって加入を認められることとなり、『潮汐・潮流の話』は無事各地の読者に届けることが出来た。

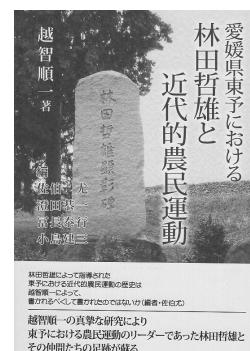
まさに泥縄方式であったが、ここでようやく、注文さえあれば全国どこの書店にでも本を届けることができる体制が整った。同時に、東京に同名の出版社が存在していることを知り（創業が同時期だったため知らなかったのだが、自営業であるこちらに対し、東京の創風社は会社組織であったため）、「創風社」から「創風社出版」へと名称変更をした。

さらにその翌年、2人目の娘が生まれたのを機に少し郊外の店舗付き住宅に引っ越した（現在地）。一階が事務所、二階が住まい。通勤の手間と時間が省け、随分と楽になった。

ところで、小社の成り立ちを語るのに、なぜ喫茶『風の街』から始めなければならなかつたのか？ それは、



『草木塔 山頭火句集 復刻版』発行 2021年10月／税込定価 1,650円／ISBN978-4-86037-309-2



『愛媛県東予における林田哲雄と近代的農民運動』発行 2025年4月／税込定価 2,750円／ISBN978-4-86037-352-8



『取材拒否 権力のシナリオ、プレスの蹉跎』発行 1990年5月／税込定価 2,189円／ISBN978-4-915699-14-6

今、振り返り、すべては喫茶『風の街』から始まっていた、と思うからである。先述の神山さん、柳さんを始め、小社の初期の著者たちの多くは、喫茶『風の街』で時間を共にした客たちだった。集う場所に集ってくれた人たちが、思いを形にして届ける仕事（出版）を始めたとき、思い（原稿）を託してくれたのである。そして、私たち自身もまた、出版の仕事への思いを喫茶『風の街』で育んでいたのだと思う。



俳句百句

そして、40年。私たち夫婦に、妹と娘を加え四人体制となり、出版点数は、ISBNを付したもので450冊余りとなった。

そのラインナップを見て、つくづく愛媛だなあ・・・と思う。

まず俳句。愛媛は自ら名乗る俳句王国。句集・評論等、俳句に関する本は、数において他を圧している。次に、地域史や民俗の分野。愛媛に根ざした愛媛ならではの研究の成果が並ぶ。そして、ドキュメントの分



『ある日突然犯人に 無罪判決の教訓』発行 1994年8月／税込定価 2,136円／ISBN978-4-915699-39-9



『ドキュメント・仙波敏郎 告発警官1000日の記録』発行 2007年12月／税込定価 1,980円／ISBN978-4-86037-097-8



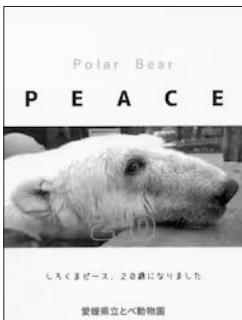
『この国の医療のかたち 否定された腎移植』発行 2007年12月／税込定価 1,980円／ISBN978-4-86037-098-5



『しろくまピース 10年のおもいで』発行 2009年12月／税込定価 1,650円／ISBN978-4-86037-135-7

野。そのときどきの愛媛の事件、事象をテーマにしたものである。『取材拒否・権力のシナリオ、プレスの蹉跌』（藤岡伸一郎・JCJ奨励賞受賞1990）、『ある日突然犯人に一無罪判決の教訓ー』（薦田伸夫・地方出版文化功労賞次席 1994）、『ドキュメント仙波敏郎—告発警官1000日の記録ー』（東玲治 2007）、『ーこの国の医療のかたちー否定された腎移植』（村口敏也 2007）、そして明るい話では『しろくまピース 10年のおもいで』（愛媛県立とべ動物園 2009）『しろくまピース 20歳になりました』（同前 2019）等々、全国的に話題になった愛媛発のニュースが記録、あるいは検証されている。

愛媛で暮らし、愛媛で出版という仕



『しろくまピース、20歳になりました』発行 2019年12月／税込定価 1,760円／ISBN978-4-86037-285-9

事をしてきたのだなあと改めて思う。

一冊、また一冊と本を作り送り出し、40年を過ごしてきた。

今はや、高齢、老境である。これからを見据えるに、さらなる年月をどう見積もればよいだろう。さすがに20年は長いだろう。10年？ それとも5年？

実は、私たちは中年の頃、50歳になら仕事をセーブして、晴耕雨読ならぬ晴耕雨出版の生活をしたいものだと考えていた。またたく間に50歳は過ぎ、その時は60になれば、と考えた。が、それも実現できないままに70歳を過ぎてしまった。おそらくこのまま「急ぎの仕事はできないよ、もう歳だからね」などと言いつつ、働ける限り働く、ということになるのだろう。それもいいかな、と思う。

しかし、その先のことを全く考えないで前のめりに働き続けるわけにもいかないだろう、と、この頃考えている。いくら私たちが40年前と同じ気分、などとうそぶいても、時間はしっかり40年、流れている。既にバブルははじけ、不況下が日常となり、ま

た本を巡る環境も変わった。街中から書店は次々と姿を消し、印刷会社もある程度淘汰され、出版の流通の形、さらには本の形態までもが、新しい形に移ろうとしている。そうしたなか、自営業のままに今日までできた創風社出版としてはどのような道を歩むべきか・・・

そうした流れに沿って静かに退場、というのも、在るべき姿と言えるかもしれない。

が、「本」がある。せめて、次の世代までくらいは、これらの本を流通させたい。それが、ウチから本を出してくれた著者とウチから産まれた本への責任だろうと思う。（そのくらいの期間、流通できれば、その先は図書館や古書店に任せよう）

さて、その仕組みは、どうやってつくればよいか？

わりと大仕事が残っている・・・



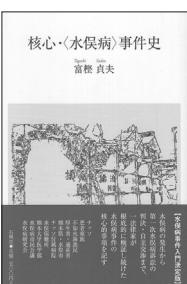
*

(おおはや ともあき／創風社出版代表)

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『核心・〈水俣病〉事件史』 ●富樫貞夫 著



水俣病は、1956年に公式確認されてから70年になる。だが今もって、医学的にも社会的にも未解明部分を残している。完全な治療方法ではなく、多数の未認定患者が存在し、補償問題は決着していない。熊本大学教員の著者は、法学者として1969年発足の水俣病研究会に加わり、73年に水俣病第一次訴訟を患者側の全面勝利に導いたレポート「水俣病にたいする企業の責任」を作成した。以来、この終わりなき事件と、患者、住民に向き合ってきた。事件の発端は、1932年にチッソ水俣工場がメチル水銀を含む工業廃水を八代海に放出したことにある。水銀は魚介類に蓄積され、沿岸住民の心身を蝕み、生活を奪った。第一次訴訟で補償協定が結ばれ、公害健康被害補償法の制定に繋がった。2004年には国と熊本県の責任が確定、09

年に水俣病被害者救済特措法が施行された。それにも拘わらず、根本は何も変わらず、むしろ複雑化しているという。遠因は初期に原因究明と被害者調査を阻害したチッソ、行政の隠蔽、歪曲。そして貧窮する患者につけ込み、住民と患者及び患者間の分断、差別を生じさせた狡猾な見舞金、補償金施策。今は患者層の変化と被害者体験の違いから、加害者と被害者の直接的な関係性が見失われ、認定問題も病状論という特殊専門的な医学問題にすり替えられ、問題を分かりにくくしていると指摘する。事件は日本の近代化が生み出したものであり、どのような犠牲の上に現代社会が存在しているかを知らなければならないと問いかける。（飯澤文夫）

◆ 2500円・四六判・291頁・石風社・福岡・202503刊・ISBN9784883443314

『死民と日常－私の水俣病闘争 新装版』●渡辺京二著



渡辺京二氏は一九六九年から「水俣病を告げる会」の会員として「水俣病闘争」に関わり、その間必要に迫られて多くの文章を書いてきた。本書はそれらを一つにまとめた〈水俣病闘争論集〉である。二〇一七年に初版が刊行され、今回はその新装版となる。『終わりなき戦いの序章』『許すという意味』等々、様々な局面で書かれた渡辺氏の文章を内在的に理解するためにはまず、一九九〇年に、自身の活動を総括するという意図で行われた講演『水俣から訴えられたこと』を読むことで水俣病事件の通時的な歴史を押さえておくといいかもしれない。それとともに本書のどの文章を切り取っても聴こえてくる渡辺氏の思想の脈動を聞き逃さないようにしたい。その脈動は、本書の中では「上層的建築物」とも呼ばれる近代経済システムや法的政

治的機構といった観念的な疎外態を取り扱ったときに、なお残存する自然のなかの生活世界、すなわち患者さんたちの存在構造の基底に渡辺氏が軸足を浸しているところからきている。この視座は例えば『チンパンカンとしての裁判』では、法的言語や市民的権利概念が外在的であるほかない患者さんたちの位相として語られ、『流民型労働者考』では、市民社会の原理では統合され得ない水俣漁師地区における流民的意識の歴史的形成を考察するところに表れる。こういった思考の深みや包括性を背景にしてはじめて「生活民それ自体の自立した闘争」(『私説自主交渉闘争』)ということの本来の意味が理解できるのである。(岡安清)

◆ 1900円・四六判・285頁・弦書房・福岡・202504刊・ISBN9784863293083

『長崎游学4－軍艦島は生きている！「廃墟」が語る人々の喜怒哀楽』●軍艦島研究同好会監



世界遺産登録(平成27年7月)から丸10年、長崎の顔として定着した軍艦島を取り上げた新刊が、地元長崎の出版社から届いた。少し読んで、コンパクトな誌面にさまざまな情報がぎっしり詰まっていることがわかり、「初心者から詳しい方まで、広く親しむことができる」と思った。

印象に残ったのは連絡船「夕顔丸」の記述。明治20年に長崎で造られて、昭和6年から37年まで、孤島端島(はしま)から高島・長崎への足であり続けた。75年も運航を続けた老船がどれだけ島民の方々に愛されてきたか、誌面から強く伝わってきた。

軍艦島が多くの人々を引き付け続けるのはなぜだろう。いろいろな側面があるが、読後感としては、東京よりもはるかに密集していた島民

の暮らしに、とても濃い人間関係が伴っていたことが特筆と思った。良し悪しはあるにせよ、それはなつかしく、かつ魅力的だ。炭鉱という産業が失われたのは昭和49年1月のこと、その3か月後、軍艦島から島民はいなくなり、多くの建物は廃墟として残った。おかげで「そこに暮らしがあった」ことを、誰しもが思い浮かべることができる。

無住化から半世紀以上の時が流れ、元島民や関係者など、往時のことを知る方々は数少なくなってきた。しかし、人々の関心が続く限り、軍艦島は動き続け、生き続けることであろう。さすが日本唯一の存在、「長崎の顔 軍艦島」なのである。(HEYANEKO)

◆ 1000円・A5判・67頁・長崎文献社・長崎・202502刊・ISBN9784888514217

『桜人伝説－桜をめぐる作家たち』●細川呉港著



本書の副題は「桜をめぐる作家たち」だが、宇野千代、水上勉、小林秀雄などの有名な作家たちはむしろ脇役で、本当の主役は名もなき英雄たちだ。全6章の中には桜に魅せられた作家を中心とした文壇史的な部分もあるが、評者が心を搖さぶられたのは、圧倒的に、無名な市井の人々が地道な努力を重ねて、大きな夢をかなえる部分である。特に強く印象に残るのは、第2章の佐藤良二の生涯だ。「桜の並木で太平洋と日本海をつなごう」という途方もない夢が多くの人々の心を動かし、彼の死後も街道に桜を植える運動が広がっていった。また何度も登場する桜校長高松祐一から直接聞いた話が本書の骨子となっていることも興味深い。だからこそ、人名索引と年表はつけて欲しかった。そうすれば高松祐一を中心とした桜が取り持つ人間関係

の面白さをより深く楽しめるのに。と書いている最中、2026年後期のNHK朝ドラのタイトルが宇野千代をモデルとした『プラッサム』に決まったというニュースが流れた。NHKの特設サイトを見ると「開花を意味するプラッサム。『咲き誇れ』という思い、もうひとつは、チエリー・プラッサムの『桜』宇野千代さんのトレードマークです。」とある。

彼女が愛し、蘇生の母となり小説の題材にした根尾の薄墨桜のエピソードがドラマの中でどこまで描かれるかは不明だが、桜が重要なテーマになるのは間違いない。本書を読んで予習しておけば、ドラマが2倍楽しめるに違いない。(石井一彦)

◆ 2400円・四六判・256頁・中国書店・福岡・202505刊・ISBN9784867350591

『さきたまの古墳と古代史』●塚田良道著



4世紀から6世紀にかけての日本列島は古墳時代、いわゆるヤマト王権（ヤマト政権）誕生の時期に相当する。文字資料が極めて少ない中、七支刀の銘文、好太王碑文（広開土王碑文）、隅田八幡神社蔵の人物画像鏡銘などとともに、さきたま古墳群（埼玉県行田市）の稻荷山古墳から出土した金錯銘鉄劍は、ヤマト王権を考えるうえで重大な発見となった。

「ワカタケル」という人名が熊本・江田船山古墳の銀錯銘大刀にも記されており、「ワカタケル」=雄略天皇が東西の地域権力にまで影響を及ぼしていたことが明らかになる。雄略天皇に仕えた杖刀人「ヲワケ」が作らせたこの鉄劍の銘文は、杖刀人の首長の地位を継承した人々の系図だという。系図であるならば被葬者も当然オワケ本人であることになる。古墳後期の5

世紀後半に築造された稻荷山古墳を筆頭にさきたま古墳群は7世紀初頭までに8基造られた。それらほぼすべてが国内最大の前方後円墳で知られる大阪府堺市の大仙古墳の相似墳とい。稻荷山古墳をつくった人物が何らかの関わり合いから模倣したものと思われ、堀の形状については方形という独自のスタイルを構築、歴代の首長もそれを踏襲していった。では稻荷山古墳を造ったのは誰なのか。古墳前期の比企地域からやってきた勢力との説が有力視される中、著者は馬具や挂甲および鉄器などの副葬品に注目。朝鮮半島伝来の技術により機内の技術革新が興隆、それを取り入れた人物ではないかと推測。（I）

◆ 2000円・A5判・289頁・まつやま書房・埼玉・202504刊・ISBN9784896232288

『江戸の改革者 蔦屋重三郎と田沼意次と松平定信』●植村美洋著



NHKの大河ドラマ『べらぼう』の主人公となり、今や一躍「時の人」となった感のある蔦屋重三郎。彼が活躍したのは、江戸幕府の政治が田沼意次から松平定信へと移り変わっていく時代でした。二人の政治家の人物像と政治体制の違いと、そんな時代を生きた蔦屋重三郎の姿を本書は見ていきます。彼の出発点として知られているのが吉原遊郭のガイド本の出版でした。時の老中は田沼意次。商業政策に重点を置いていたその政治は賄賂政治などと批判されることもありますが、それだけではなく産業振興、印旛沼や蝦夷地の開発など進取の気風があった時代と言えるかもしれません。

こうした中で自由闊達な雰囲気が形成され、蔦屋重三郎はその後狂歌や黄表紙といったジャンルにも手を伸ばしていきます。一方で田沼の

●植村美洋著

後を受けた松平定信は農村重視・社会風潮の綱紀肅正と、田沼時代とは一線を画した政治姿勢をとりました。しかし松平時代には徐々に蔦屋重三郎の出版活動も制限されていくことになります。彼自身も处罚を受けますが、それ以上に本の著者陣が活動をできない状況に追い込まれていったのでした。それでも浮世絵や大首絵に軸足を移し、著者曰くあの写楽を使い倒すほど活発に出版活動を展開し、それを全うしました。そんな姿からはふたつの時代をしたたかに生き抜いた蔦屋重三郎の姿が伝わってきます。一方で政権中枢から失脚した後の田沼と松平二人の政治家の対照的な晩年の姿も興味深いものです。（副隊長）

◆ 1500円・四六判・198頁・歴史春秋社・福島・202504刊・ISBN9784867620595

『午後のコーヒー、夕暮れの町中華』●安澤千尋著



ふらりと街を歩くと、たくさんのおいしい店との出会いが待っている。もともと通っている馴染みの店や有名店、チチコミで知らされたり、通りすがりに見つけて、いつか行ってみようと思っていた店。出会いの形はさまざまだけれど、いつだって街にある小さな店に助けられ、生きる力を取り戻してきた。

そんな元気をくれる店を街歩きエッセイストが教えてくれる。浅草、上野、日本橋など7つに分けた東京下町エリアを中心に全61店。初めてひとりで喫茶店に行ったのは小学生の頃。焼き立てのホットサンドを食べながら仕事を終えた母親が来るのを待つ。それが喫茶店の原風景であり、大人になって街歩きが始まった。「銀座ブラジル浅草店」のチキンバスケットはいつも揚げ立て。もうひとつの看板メニュー、カツ

サンドは端のどちらから食べてもおいしく感じられるように脂の部分を互い違いに並べてサンドしている。映画を観た後、日本橋の「ミカド珈琲」で余韻に浸る。日曜営業がありがたい神保町の「三幸園」で遅めの町中華。その他、甘味やそば、オムライスや和定食など、あらゆるジャンルのおいしいものと居場所の記憶が詰まっている。食だけでなく、ささやかな労いの言葉や世間話で心を暖めてくれる店員さんとのふれあいや、幼い頃、祖父母も含めた家族で訪れた店でのかけがえのない思い出も甦る。中には残念ながら閉店してしまった店もあり、街も人も店も変わりゆくが、店の佇まいや働く人の矜持は変わらずに記憶に残り続ける。（Y）

◆ 1800円・四六判・222頁・書肆侃侃房・福岡・202505刊・ISBN9784863856721

壳行良好書

[出荷センター扱い]

- (1)『あなたに犬がそばにいた夏』1900円・ナナロク社 (2)『水脈を聴く男』2000円・書肆侃侃房 (3)『菜食主義者』2200円・クオン (4)『眼述記』1750円・忘羊社 (5)『石炭挽歌』2300円・寿郎社 (6)『個展のつくりかた』2000円・風鈴社 (7)『つながる沖縄近現代史 増補版』2400円・ボーダーインク (8)『さきたまの古墳と古代史』2000円・まつやま書房 (9)『現代語訳 上井覚兼日記4』2200円・ヒムカ出版 (10)『情報の歴史21 増補版』6800円・編集工学研究所 (11)『よみきかせのきほん』750円・東京子ども図書館 (12)『ウミガメ博物学』1800円・南方新社 (13)『たまののののちゃん』1100円・蜻文庫 (14)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房



[ジュンク堂書店池袋店 地方出版社の本一センター扱い図書]

- (1)『石炭挽歌』2300円・寿郎社 (2)『現代語訳 上井覚兼日記4』2200円・ヒムカ出版 (3)『つながる沖縄近現代史 増補版』2400円・ボーダーインク (4)『沖縄の身近な植物図鑑』4500円・ボーダーインク (5)『花粉症』1720円・上毛新聞社 (6)『千夜曳摸』1800円・青磁社 (7)『調査されるという迷惑 増補版』1500円・みづのわ出版 (8)『新装版 奥武藏登山詳細図 全132コース』900円・吉備人出版 (9)『新版改訂 高尾山登山詳細図 全132コース』1200円・吉備人出版 (10)『井の頭公園いきもの図鑑 改訂版』1800円・ぶんしん出版 (11)『新版 奥多摩登山詳細図 西編』900円・吉備人出版 (12)『北陸の中世城郭50選』2700円・桂書房 (13)『クロマツの海岸林のものがたり』1700円・秋田文化出版 (14)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房 (15)『環境動物昆虫学のすゝめ 生物多様性保全の科学』5000円・大阪公立大学出版会 (16)『眼述記』1750円・忘羊社



以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。

URL : <http://neil.chips.jp/chihoshou/> X (旧ツイッター) 公式アカウント : @local_small

トピックス —★★★

▼精神に不調を抱える人たちが寄稿する文芸作品や、2022年に亡くなった精神科医・中井久夫氏の著書を患者の視点から読み解くという企画によって知られる雑誌【シナプスの笑い】(ラグーナ出版刊 最新は56号)が創刊20年となるのを機に精神障がい当事者ライプラリ「ラグーナのほんだな」を開設することです。精神疾患・精神障がいの体験を綴った書籍を、自費出版・商業出版にかかわらず幅広く収蔵することをめざす、としています。概要は以下の通り。

○「ラグーナのほんだな」開設場所：就労継続支援B型事業所ポラーノ・ポラリ(鹿児島市唐湊2-10-2)

○寄贈方法：住所・連絡先(電話番号やメールアドレス)を明記のうえ、下記へ
〒892-0847 鹿児島市西千石町3-26
イースト朝日ビル3F

株式会社ラグーナ出版「ラグーナのほんだな」係宛

送料は発送者負担。

○問い合わせ先メールアドレスなど詳細は以下で公開されています。

<https://lagunapublishing.co.jp/lagunahondana/>

▼「シナプスの笑い」とは。

「2006年、こころの病と闘っている仲間、精神科医、精神保健福祉士らが精神科病院の図書室に集まりました。「病の体験を言葉と力に変えて伝えていく」という志のもとにこの本が生まれたのです。それは、思いかけずこころの病を得た仲間たちが、途方に暮れながらその先の道を模索し、ここを見つめ、世界を見つめ、言葉にしていく活動でした。本のタイトルは、こころの病の原因とされる脳の神経伝達物質が行き交う場「シナプス」と、回復後に生まれる「笑い」に由来しています。」(ラグーナ出版HPより)

地方・小出版物のデータになります。
綴じて保存してください。

ジュンク堂書店 淳久堂書店

池袋本店

営業時間：午前10時～午後10時

池袋であなたのふるさとに帰ってみませんか？

2階「ふるさとの棚」では、
地方小出版流通センター扱いのご当地本を幅広く取り揃え、
皆様のお越しをお待ちしております。

〒171-0022
東京都豊島区南池袋2-15-5
TEL 03-5956-6111
<http://www.junkudo.co.jp>

